

『古事記成立の研究』に向かつて

菅野雅雄

一

昭和四五年に『古事記系譜の研究』を、続いて四八年に『古事記説話の研究』を纏める機会を得て、帝紀・旧辭に対する自己の一応の観点を作り上げることができ、古事記の構造の解明と成立論への緒口が見えてきたように思われ、考察の対象を、本気で構造・成立の面に向けた。

二

それに先立つ昭和四六年に鳥越憲三郎氏の『古事記は偽書か』が世に出ていた。古事記偽書説は、中沢見明氏以後も佐久達雄・宮嶋弘・筏勲・松本雅明・遠藤元男・藪田嘉一郎ら各氏の、特色ある説が地道に、しかも間断なく世に問われてはきていた。この鳥越氏説は、古事記、特にその上巻を日本書紀の記載とかなり恣意的に比較して、記の後代性を論じたものであったが、折からの古代史ブームの中、特に既成の概念の打破、権威の打倒という時代風潮とも合致し、加えて記紀の研究者からの表立った反論もなかったため、偽書説はかなりの話題性をもって世に迎えられ、さらに五〇年に大和岩雄氏の『古事記成立考』が出て、偽書論は一時の流行をよんだ。

しかも識者によって指摘されているように、大正末から昭和初めにかけての中沢氏の偽書論に対し、安藤正次・倉野憲司両氏の駁論があるというものの、駁論は時局を反映して古事記は真撰であると繰り返すのみで、その論点は充分にかみ合っているとは言えないものであった。そこで、古事記の成立を論ずるには、この偽書説を真摯に受け取め、それを克服することが肝要であると感じ、それ以後しばらくの時間を古事記偽書説の歴史の構成とその検討に費した。五一・二年の三編の偽書説に関する報告と、序文偽撰説に対する反論、五二年の「記序偽撰説批判覚書」(『古代文学』)は、その結果の一部である。

かくして記序を偽撰とする説の成り立ち難いことは、ほぼ見通せたが、やはり、序文中の大きな問題は稗田阿礼の存在である。また今一つ、本文について西田長男先生の提出された大年神の系譜、曾富理神に関する神道史上の問題については、未だに解決できない。

三

前記した稗田阿礼に関しては、その後新たな展開を遂げた。既に早く中沢見明氏の所説中にも記の編述に中臣氏の関与が示唆されていたが、上山春平氏などは記紀の編纂に藤原不比等の関与を積極的に認め、遂に稗田阿礼・藤原不比等説まで提出された。この不比等・阿礼同人説はともかくとして、古事記に中臣・藤原氏の影響の強いことは争えない点であろう。私が早くにその点に思い到ったのも、偽書説の一点、わずか八年の間隔しかないのに同趣の記と紀とが編纂されたのは不審であるという論拠に対する反論の一つとし

て、「葛城氏の記載をめぐって—記紀二書の比較—」(四九年『古代文学論集』)の一論をものした時のことで、この論で、記の伝承が中臣氏の肩入れしたものとなつていゝとの見通しを論じたのである。

こうして、偽書論に駁することが、そのまま成立論へつながることになつたが、私はそこから記と書紀との差を追究することによる古事記の特質の解明へと向かつた。「古事記冒頭の訓をめぐって」(美術文化史研究会)・「古事記の志向するもの」(上代文学会)・「建御雷神」(古代文学会)等、口頭で発表したのは、すべて記紀二書の比較に基づく古事記の本質の解明をテーマとしてのものであつた。

四

この間、紀前記後説の提唱者であつた梅沢伊勢三氏が、五三年『記紀論』を著わして、書紀編纂に不満を抱いた天武天皇が、書紀に対抗するものとして記の編纂を企図した、と論じられた。この論は、具体性の乏しい一試論に留つてゐるが、非常に興味深いものであり、いづれ、記紀本文の比較検討によつて具体的に裏付けられる可能性もあると思われ。

また、古事記成立の研究の中で見落せない業績に、三谷栄一氏の五四年「古事記の成立基盤と神祇官」(五五年『古事記成立の研究』所収)の論がある。その説くところは、中臣・藤原氏の勢力下、書紀は太政官側の編纂、記は神祇官側の編纂と結論づけられたものであつた。私にとっては教えられるところの多い論である。ただ私も

かねてから古事記が神祇官的世界の産物であることを折に触れて公言してきたが、それであるが故に祝詞の世界とも重なるものであると考へてきたが、書紀は非中臣・藤原氏の産物とみており、三谷説とは異なるが、そこに古事記の独自性＝本質が存すると考へてゐる。

現在の古代文学研究の状況で、記を論ずるに當つて、多く書紀の記載伝承をそのまま解釈に援用する傾向が見られる。前述のごとく書紀の編纂事業が進行しているのに、取り立てて記を筆録したとするならば、そこには全く異なる編纂意図があつた筈であり、ならば同趣の伝を記述していてもその相互利用には意を用いるべきであり、〈記紀〉と纏めた上に構築される古代文学論では、却つて誤りを含む恐れがあるのではなからうか。このような観点から古事記編述の実態を追究して、記の記載が古伝承そのままではなく、天武以降、特に文武・元明朝に至つても、その伝承にかなり手が加えられていたことを想定し、その点を論じたのが「豊宇気毘売神の出現」(五二年『論集古事記の成立』)・「神武記の構想」(五三年『古事記年報』)「古事記」の欠史八代の構想に関する一試論」(五三年『野州国文学』)であり、万葉集をテーマとしたが「日並皇子試論」(五四年『美夫君志』)も同一線上のものである。

五

以上述べてきたことの再言であるが、今後は、記紀二書の比較を通して、古事記編述の意図を明確にし、和銅五年筆録完成の前夜まで伝承に手を加えていたと考へられるその成立過程の研究を押し進めていきたいと考へてゐる。